

7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5 6 7 8 9 100 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

湖
月
鈔
卷
一



湖月鉢參攜瑞條固

此物語化者事

紫式部系圖并傳居而墓去而等

号紫式部事

式部廣文事

物語之發起

文法

大意

物語准授

物語時代之下意

物語述作之時代

此物語故人称義事

題号称光源氏物語事

源氏字事

源氏姓事

物語無教事

卷々次才

諸事不同

諸抄

凡例

卷々付名事

此物語有异之卷事

源氏物語系圖

一集禪因古作同年立日作外ニアト。

源氏物語表白外ニアリ

一
此物語之作者 明星抄云業式部ノ筆作勿論之
矣也。一說云、父為時トキ作之。息女式部ヲシノヒコ加筆之由。宇治
大納言物語と見る。年ひたり。花鳥字源大納言物語よ。今
ハ首鐵エキセイ前ちるる時とて才をもて世よりぞとく爲す。一
里うちの紫式部シモツノシモツ親ぢりはあ附源氏ハツクニシモツ也。
こ處コトコトとひそめよとせりきりきりとぞ。さき
いのまほ牛シカとさうりやとじそめと石出イシナハタラば源氏作
うるす行ハヤハヤつゝくら。もうてはつくらくらかひりとぞ
P. ひづきうちとくわん

明星抄著人の推量に分。女房の胸中より去出る所と
ハ足のねが此後をこうやとへまわれば式部シモツ度十九
人よりぬと為時トキ作の役をひ渡さん御り

一 法成寺入道 河童殿也 圆向の奥書云。法物語世より皆式
教化とのいなりへり。老は丘等と加く不也云々

明星 これど是を自給乃半すとくべ

一 佐説此物語雖前ちある時書と云へ也へ云々

一 明徳院御記承久ニシテ紫式部書之とのきくも。又清浦

朝臣袋草紙云。故物語のキテ入撰集。ハリトヤヒヤ。又清浦
後拾遺雜一文為時奇。ハリトヤヒヤ。是ハ源氏物語のキテ。うの
よせり。アリヨウ月をもと。是ハ源氏物語のキテ。うの
物語。アリヨウ月をもと思。一トナリ。件の物語ハ豈ひ不作
也。トミ。傳云古人の古役皆是式部一人の作とある
づき。が教と残。トウ。

一 此物語の作者是式部ハ勸修寺元祐良門より五代越

明星抄

系圖

圓院左大臣冬嗣公六男

勸修寺元祖

ヨシカト

贈正一位

从四位上右中將

内舍人正六位上

小一条内大臣

タカフギ

お寛平贈正一位

延喜御外祖

勸修寺家祖

哥入

タカヒヨリ

為頼

惟規

利基

藤原系圖左中將云

カヌスケ

贈正一位

从四位上右中將

内舍人正六位上

小一条内大臣

タカフギ

お寛平贈正一位

延喜御外祖

勸修寺家祖

哥入

タカヒヨリ

高藤

藤原系圖左中將云

カヌスケ

贈正一位

从四位上右中將

内舍人正六位上

小一条内大臣

タカフギ

お寛平贈正一位

延喜御外祖

勸修寺家祖

哥入

タカヒヨリ

利基

藤原系圖左中將云

カヌスケ

贈正一位

从四位上右中將

内舍人正六位上

小一条内大臣

タカフギ

お寛平贈正一位

延喜御外祖

勸修寺家祖

哥入

タカヒヨリ

高藤

藤原系圖左中將云

カヌスケ

贈正一位

从四位上右中將

内舍人正六位上

小一条内大臣

タカフギ

お寛平贈正一位

延喜御外祖

勸修寺家祖

哥入

タカヒヨリ

高藤

藤原系圖左中將云

カヌスケ

贈正一位

从四位上右中將

内舍人正六位上

小一条内大臣

タカフギ

お寛平贈正一位

延喜御外祖

勸修寺家祖

哥入

タカヒヨリ

高藤

藤原系圖左中將云

カヌスケ

贈正一位

从四位上右中將

内舍人正六位上

小一条内大臣

タカフギ

お寛平贈正一位

延喜御外祖

勸修寺家祖

哥入

タカヒヨリ

高藤

藤原系圖左中將云

カヌスケ

贈正一位

从四位上右中將

内舍人正六位上

小一条内大臣

タカフギ

お寛平贈正一位

延喜御外祖

勸修寺家祖

哥入

タカヒヨリ

高藤

藤原系圖左中將云

カヌスケ

贈正一位

从四位上右中將

内舍人正六位上

小一条内大臣

タカフギ

お寛平贈正一位

延喜御外祖

勸修寺家祖

哥入

タカヒヨリ

高藤

藤原系圖左中將云

カヌスケ

贈正一位

从四位上右中將

内舍人正六位上

小一条内大臣

タカフギ

お寛平贈正一位

延喜御外祖

勸修寺家祖

哥入

タカヒヨリ

高藤

藤原系圖左中將云

カヌスケ

贈正一位

从四位上右中將

内舍人正六位上

小一条内大臣

タカフギ

お寛平贈正一位

延喜御外祖

勸修寺家祖

哥入

タカヒヨリ

高藤

藤原系圖左中將云

カヌスケ

贈正一位

从四位上右中將

内舍人正六位上

小一条内大臣

タカフギ

お寛平贈正一位

延喜御外祖

勸修寺家祖

哥入

タカヒヨリ

高藤

藤原系圖左中將云

カヌスケ

贈正一位

从四位上右中將

内舍人正六位上

小一条内大臣

タカフギ

お寛平贈正一位

延喜御外祖

勸修寺家祖

哥入

タカヒヨリ

高藤

藤原系圖左中將云

カヌスケ

贈正一位

从四位上右中將

内舍人正六位上

小一条内大臣

タカフギ

お寛平贈正一位

延喜御外祖

勸修寺家祖

哥入

タカヒヨリ

高藤

藤原系圖左中將云

カヌスケ

贈正一位

从四位上右中將

内舍人正六位上

小一条内大臣

タカフギ

お寛平贈正一位

延喜御外祖

勸修寺家祖

哥入

タカヒヨリ

高藤

藤原系圖左中將云

カヌスケ

贈正一位

从四位上右中將

内舍人正六位上

小一条内大臣

タカフギ

為時

花城

感前奇

女子

明母常陸美子

母右馬以家為信女

御堂園白妾去右衛門佐宣孝室

一 河海抄云。紫式部ハ鷹司殿御堂園自北方一条先太臣雅信公女從一位倫子の官女也。お縁より嫁して大貳三位弁局。狹衣作者と生

一 河海云。式部旧跡ハ正親町以南京極西頬。今の東小院の向也。此院ハ上東門院の山面乃改也。

上東門院彰子御事 一条院后也

御堂園白道長女。母從一位倫子云。長保元年十二月朔日入内。年十二云。同二年三月廿五日立

后年十三寛弘九年二月十四日皇太后宮寛仁二年正月太皇太后宮万壽三年落第為尼。號上東門院法名清淨覺。ト畧

一 河海云。式部墓所ハ雲林院向毫院の南。より。小野曾ウ墓の西也。宇治の宝龕。日記。小野曾ウ墓院ハ淳和天皇の難宮也。異本れをよき源氏雲林院贈僧正の許可とからうりて。天台一心三觀の血脈。あり。ひいて雲林院乃幽閑。もあり。クモ。故うりや。一紫式部と云奉。清濁袋。名。紙云。紫式部と云名。二院あり。一には物語乃中。又。着紫の生と仰う。墓院。乃ち此名とゆう。一曰。一条院御乳母のよ。上東門

よしてまつもじりとて君ゆうりてあかりをと風食
とやうこちあきのせんげ居あり。此名野の事也。云々 河内之
明星 畜の一りとゆす武藏州の事ハもがくと矣とぞ思ふ

河海云。一部の肉聲よりの事。ともぞれと書かく。まかよ若
武部の名とあらわして紫武アと号ぢれどり 益曰
一後云。友武部の名幽々あらわして有の元乃はみゆうり
よ其の字もよあらわと云ふ 明星あ口

明星抄云。世ノ日記云左衛門督ム往カリ。一ぱ見
キニモヨア紫ヤ。アヌトウクシヒキ。源氏ヨ仰ク。アキノ
アコナウルヨウヘハツシ。也。アキウルトウクシヤアリム。
愚案。アレ紫の上とモ。シテモ書。アシテ。の後。アキナ

102

一式部の精学の廣さのやまとよりしては、可成れば物語
とちりてめ後拾遠以後の撰集よ歌教アニタ入へり。儒
家の史漢の歎ひあらよかづり不わあくえり
河海お云。紫式部ノ日記よまへ里よゆく史記と文
と後かどもすり。史記よ通じきりすわくさる
フリダウエキ
ねたひ天台一心三觀の血脉とつまづり。又式部ハ觀
あらの化身たりうきどにゆよわそともと。又の里お云。般
徳虎御記云。汝あらと始一乗後ゆくらんありこふ。不
後のゆり。式部ハ日本紀とよくともとるづり。クレ
修ム。サエモナリ。リーフ
修ム。サエモナリ。リーフ
と号をりえ。紫日記よばりと載つり。在の海
一此物語之發起 明星云。紫式部ア上東門院よ官女

とて伺候の上東院へ一条院后

大教院より

村主天皇正親王

めつゝやうねじらぬ宿ややうとあらわうよううや竹ひら
御の古物館へ同すれられべ軽しく歩りてこそゆうす
きうく武部よりれきんがさかまく進之云
堀花折三々

至日く

お云遷みと大教院よりへ香融院より後一条院

もとその教院よりよしのくに

大教院よりみ七十一年

歎き云

明星云河は往とうく分へ上あつたる所とすやまうり
そ石山寺より通じて通じてせうと行戸とよ門と
八月十の東の月御水よううりてふれどみよもくに地
の風信くうういきれば先染の墨のあ巻と云ふと

うちこれも依くほのきよと未ハ十八夜也さうとや
一あくとくまるとくさればる山寺に宿を趣向とせ
まうく縁起よとくとくとくとくとくとくとくとくとく
く八十四帖をかれてまつゝと確大納言行處によ傳書
させられて斎院へまづせられうるよ法成寺の入た圓白
奥去とぞれうるよ。仰あまえ流の役なり

明云河海云山まよ通水の内相達の趣向とされ
うむよとて、山あよもくら大般若の抄紙とゆきのひア
て魏(ヒエイ)にて作(シテ)れられ又毫と云ふめり。故よ羅摩懺
悔の文ある般若一部六百巻と一巻よ自書て奉納
をす今よのみ寺よあり。此大般若の文は寳も勿
事(シテ)うい般若と一巻よ去るをあらざるか似も

宋後蜀

愚素

愚案 おはの海抄の文代姫と接觸半々をづき
一 明星云。源氏ノの事よ源氏の左近サヤシと云ふありふる。
西家タカマキ左近サヤシもぬ云。 醍醐天皇タケコロ天皇ミコト子。 冷泉院レニヤイ左代サハシ安和二年アハに
左寧ダナヒノツツ左近サヤシもれモレりて、左近サヤシが女式ガガシア幼マサニりマサニられ
もれモレりて、左近サヤシが女式ガガシア幼マサニりマサニられ、左近サヤシと左近サヤシ子比シテし。

紫とと式アラ、うやうがよすきへて左納云高麗相のあ
レニラユウタニハクキヨイシニシハカニガヘ
トリ岡公且白番易クチ坂勘て越向とお出をりと云
角り愚案是もい海の事ヤリ

一文法 明星抄え。先輩萬葉の大綱。萬葉が寫言ふ事と
はなり。萬葉とよい已ヨリが言ハシメテ。他アリの名ナミと傳ツキふ
る。いつりとサジ。萬葉が文法ハタチを作ツクり出スルてやう。

イノ吉
とつもせり。もうちをまくと、も実のまこと此
物語よふ事の傳承も、もあ實と考へるが、さう
と云ひ實也。されば、すみや、筆と手のあらうりと、ん莊
すう文章より、一切經の文章へ生れりと、唐人、やあ
くちくに、一切の詞を言葉の世界より出でさせ
愚素寓寄せりとある、うる人の名を作り、それ
よもじこつよもじうといふをもむ御から

明星抄云。うらづく文辭を似たり。又ハ史記司馬遷作。法とぞう。卷よほ事とぞうも史記の考覈ト操モとぞう。此れ古の物ト也。一川トリと取つやく。あるいは。寓言ハ。莊よほも。うちも。あるまとまの虛説ハ。とも。司馬遷リ。史記ル。筆シ。

思來卷の次第史記は換ひアリテ三國記也奥ノリ記

も又虚誕りとては唯極の如き

一大意 明星は物語一部の人を寫すに妙徳として
建立すりとつてよ。作中の文章人をして仁義の常の道よ
り是れゆ中通實相の妙理と悟らしめく。出世の苦根
と感化もぐとく。されど河海あるを爲すの支に義のた
ぬ色の媒若授の筋よつてうまくい。是もそのをもとにしておこ
とづく。弁花、源四之

おん内曲外曲へ千万袖み
難解難入也。仍て権化乃
方便と云々。一代權實内外の書典乃
意旨とひもひも。一
般よびと。ありと假名四十セ字もあざしてせう出世の方は
とのせく。ゆきす明鏡よ向よ。まことのれとひもひも。
きば則天地色暗淡あり。況や人間よとづくもや。是よゆて

盛者必衰、會者定離。生老病死有為博愛の理と
くあらざりばくよとつて世間常住壞室の法文とぞ。れ
懺悔菩薩の文此物語の大意也。

或抄云。稱名院事蹟也。妙やじひ菴子寓言と摸して作物也
也とソトと一事として先賢本傳もととものとて。併男
女の道とリくそくの園雅螽斯の徳玉通活世の昭すうう
ふうれど。その中に妙美嬌風のとく一曲やうすとあうる
へ陽うらわくはやうりふく。君子のつじふむちうにあり。後
人子てうじりんとあり。凡てに義礼智の大綱より。佛果
菩提の本源よどろき。此物語ともうれくほの勝負と
來りん。学者流ゆる眼とけ色一まことひすまこと
ひづくよ書かきよあくへふそりあくて公私すほあく

人のふとつも。倭唐とみて物語の情とあらじ。五十四帖
の内より男女のうごりとくわうりいとが。三四代のる。えも
后も男と合とめらすとのそめり。やうそと差詮のた。諸寄
のゆりひと。附まつてもくちくち。やよつまきて教つまとりそ
とく

明星抄云。帝玉四代年紀七十餘年の興廢と今眼
よりううぐくううどううく

又云。まよ不審とうじんあり。是物語へとりくみぬえ淫祀の
風也。行きて仁義ふきと御之とがと。是道とあらうう人の
一喝の聲えたり。四書八經と仁義五常と有とく書よ。
時よ淫祀の惡虎ともぞもく。是よよく思とべううと
んのと。尚書よ朝よ渡るもとの脛よ切。比干とひー賢人

の胸とさへするより必ずもつてゐるからとて身に付く
べきよれど毛詩又淫風ともいふとせんの史傳亦
暴虐ともうとり是後人の戒なり。經教の中にも提婆
うみ達又に王經より百九十九五のくびと云ふんとせらす。
又阿闍世太子の文王法華義もし母と害さんとせらす。ま
せの群生を成さんとらへ。妙法輪と妙法淫風のくびとのせて
は風のすりめじにされどこそ世の教也とばらわれまされん四
書の經の人の耳よきくらくに義のなへて。況や女房
じこのうちよを済すまし。それへまう人の耳よきく又
人のぬきの淫風とぞ引く。苦遊の蝶とて中庸
のむより入。諦ふ心中道実相の居よせりへづき方復此
教也。

明天台一家の心四教よけで化教化法のあ種乃四教あ

ア・え化法の四教といふも

三教教

四阿含 八十誦 律 定成論の三教也

五部律

一切の小乘論

とあくよ後までもお陰とれて戒定慧の三法門也是小

乗也

通別 圓の二教ハ大乗也三大乗ともいふ

愚素是五時の說法よけで仏の教と法師と云ふことを

化後の四教ともいふ

頬 浴 不定 祕密

愚素是ふ時の說法のちの儀式を解とひて是

此れ縞四教とすくもうどうと云ふ

愚素是事は最初よりつきてもうやうて、返而運動

一物諸種種類之書

同
時代 醸
六代
六代
六代
朱雀
村上

物語燈柳之事
時代醍醐朱雀村上の二代よ准
多喜。桐臺門へ延喜。朱雀へ天慶。冷泉へ天曆。充源
氏へ西宮尤大臣。如此相處しとく。孟明月

欽へ西宮尤大臣
如^此相處^しく
益明

河桐巻より初物よあひてくわきも亨ひ乃
ゆすとのまゝうへりもひくれらんがく長根可の内絃亨
み院の寺せまくると松ぐまゝよきをまゝくとまく又ちの麻人コトノハシノヒトと
まのくらよめうらん事へすくの御門のいきりめあれども
乞ひ遠誠也

又繪合より朱雀院の御事と延喜のゆきづる
と云ふ事も又よづかせの事すども古事記と云ふ
又昭宣ヤウゼン公の母へ寛平カンヘイ法皇の室女延喜の帝カニは妹也
致仕大臣ノホシジンの母と相應々乃の帝カニの古脇カニとあり。此
外毛毛也也

外毛之化勢

愚弟某是相應帝と字ひの帝の臣下おほきわざ也
朱雀院と大慶よりおもて也

又云作物経のあらひも網の其人の雨氣わんも行迹され
ゆくへあがくらよとくまうれと換ともすかへ漢朝の書
藉春秋史記かとて實錄かとづくの異同へあらう。乃相
蓋の帝冷泉院と延喜天屬よりもくらむりかく、或は
唐吉家のちきもありと。又の秦始皇のくれう例とす
てより、又天慶古門の相續の重胤ゆくにまゐねども、故あ緣
よひ朱雀院のゆみ今上冷泉院のゆみかへ或收えひ余有
者」と題す
お秦始皇れほく例とて日本の重胤よそもつ源
氏のゆみ冷泉院のゆみと而位のゆみの例あり。

唐より海秦秦始皇の在裏王のよりへあらど。臣下昌
不韋、うみとえ後ありり。もと冷泉院のよりよまくすり

愚案クシノウ言家の方をさまでへ桐壺の卷よ秀

一光源氏之准授。お凡作物始のうへひも行迹と摸しる
事。一様シカニとぞとぞとつ名の仁明天皇の御子西三條左大臣
源充ヒタチと摸しれ。羨男よりつ多く充と称ハル事。廣幡右
大臣弘充ヒロヒタチのふとを充が將。天下第一の羨男よりつ多く充
が將と名づきと称ハル歟

明源充徳道兼後の人也。凡姓にト摸ハシマツ

お法藝徳道アリ。延喜ヨシノ御ミササギから左大臣信公の西祭
と摸と

一せ源氏左近の事。ハ延喜オ一の皇子西宮左近ヒガタノミコト明公

の例。ハ公ぬ治わうてこしひさくまひー人こち明公え
服ハムあよ源の姓とあふ源氏の毛とくればく又ちぬる毋
ハ更衣周子ヒラタケ左大弁原唱ハラハラ文衣服とねびら

源广の湯よ謫居のゆ行平中納ハラハラとく。謫
居の時風雨の變わうて石人シトヒト。周ノ日ハラカイの東征ハラハラ
よほそく。又宮丞相於宰府テサキフ。天よ行のよすわう。源氏も
終玉又佐吉立承のゆねびら

ぬ色のゆ。至中将の風とよづ。則ニ秦后よ准ハラハラて薦ハラハラ
女院二條尚侍テサキフ勝月ハラハラよ寄通のゆとつまう
帝位よのり。ざる人ハラハラ上天皇の号ハラハラ。漢ハラハラ主祖
又太公是漢の初例也。其のじ日キよのを壁ハラハラ主ハラハラみうち也

愚案莫壁室モハラハラみへ文武天皇の内文也

高麗の相人よ爰あす。延喜皇子文彦フシニヨ太タケルみとねしも
くあり。文彦ヒナタへとくらう名。諱ヤヌスへ保明スキラ郭王。凡一ゆく早世
延喜の時代の前後也。

愚云ちがえは假りゆくがわの趣向に乞物語よひも
よびきもの古事記の例とみて云ひやうり。寂地のゆゑも
いきの古時よりうそどひくくうには代とうくづくもせ
の廢敗とあまうんづら。又寓云の書は也

一
此の御館延喜といひあつてよがみをもす。其原の歴くもあら
日本ノ國史ヨクシニモギ
充孝天皇仁和ニ年ノ八月トムノリヤトモアリテ。モ後國史
ナカニテ。伏也始ともうとよ。六十代醍醐ノ帝トムリモアリハム
上ノ日かの國史トムリモアリズム。六十代宇多乃

帝とのぞもえ延喜ともアモリムハ、聖代をみの明玉も
是れ延喜とす。是れ聖母の延也

細流云。孔子の春秋を哀公まであらわし。魯昭公哀公
周の敬王の時代よりあり。も後立明サキウメイノ後
王の時代までありて。考王夷烈王以下の事とある。も
豫レバよ司馬溫公シマウニシ通鑑ツガとある。是夷烈王元年より
ある。是を左傳シラヘよもう。ほくへきりある。此れ後漢書
の歴代とある。今と被り多くある。

物語述作時代 三 寛弘の時代
寛弘より康和のまゝよ流布と
りくわきよ事。ふ條之位 後成以
あね黄門 定家のひうち

卷之三

一此物語故人称義事

吸烟院記

承久二年

一切の物語とても、うちの

す。うちハ託事

（タスル）

伊勢お宿へ宿ひよしとす。かくす。

上よりき御勝へんかへ下よせられども外か。

いへどものめ縁とつてしてそぞば。ま金きをなほ。ほ民のぬ倍不可役乃

ねく。又よ凡人のあるよあへど。紫或ア書之。

中畠律は佐藤法

道傍は一篇よつま。不可役未曾有也。

下の役よ源氏の寺

ハ勢也。役衣の寺ともあれと云人ありと云え。い筆ふくく

（シナリ・サコモ）

されども。文よ同日の論よあへど。極よ役衣の寺もがくわ

（シナリ・サコモ）

くもうあれども。源氏の寺よひなづくとす。雲泥也。

凡奇道はあらとくうどうと水火のくわたりあれ。源氏ハ曾

（シナリ・サコモ）

えりゆく。寺ニヨハ寺秀逸。を又何人。ク是よ及ゾハ寺ニヨ

（シナリ・サコモ）

よ御つて。寺ニヨハ寺秀逸。を又何人。ク是よ及ゾハ寺ニヨ

（シナリ・サコモ）

ハつうと爲し。虚玄とゆく優美とゆくとひ是よとする

もありぬべし。但いまだとスど可と又不可役く。

鏡云（出山内府）

忠親業或アグ源氏お宿つくりつてゆくはよ。凡丈

（シナリ・サコモ）

の不役とい差ゆべど。日本紀とトドカシテ。徳宗日記

（シナリ・サコモ）

於後お了あ

一題号光源氏物語 卷之金篇支源氏の源よりと塗用とも仍舊ノ細目

河或統云此相給といひえ源氏相給と号シテ。ソウヘ源氏と云相給相あつて中に支源氏相給ハ紫式部が作云。是を今葉の表也。紫式部寛弘六年の日記は源氏相給の由來よりうどもせきとあり。又の後すと紫式部源氏相給と云ふ事と云ゆ。代々の集ノ有りぬる事。奥入るる是より先源氏相給と云ゆ。もくべえと云ふと加べ。さうみづしに類するれば源氏トナリヨリモクアリノダラ

矣

一源字 お荀子註根本也 愚云韻書水之本也

細流云古今序山下水のくもといつぶく水の源

とちくすり。嵯江幼監觴入楚乃無塵山谷少四答
刑敦文詩といふ
ぐく。是ハ女のくすり。去すり。されども共ひ候も
うねりあり。凡体抄系紀。行り。仍署之

氏字 正義云氏猶家。款例云別而称之曰氏。合而言之

之曰族

一源氏姓 お源字ハ監觴小水歟九河之源の表よ枝

一て用ひ。此物語色如也

河海之源姓始于嵯峨内子信公

お是ハ嵯峨天皇弘仁五年ニ男女皇子三十余人より
源氏の姓を下されたり始ふ。もあハ源氏の姓なると
其前へ皇みと凡人よどりとてあくの姓があり
也。源の姓がおまてしては皇子の別の姓よどるるから

テリ。されゆよ帝王のゆみの臣下よとくとく。一せのみ源
氏とく。親王室下うれば親王也。臣下よならはのすく。又親
王の臣下よからとニ世の源氏とく。天子の孫く。

一法物語無教

真徳々天台六十卷

天台六十卷よかゞくして源氏卒

帖とりくらも中よ并の巻ありて大へ帖よかゞく。毛と
法華經大八品よ擬と天台六十卷とく。

玄義十卷

天台大師作

釋藏十卷

妙樂大師作

摩訶止觀十卷

天台作一部ハ
軸文句も教也

弘安十卷

妙樂作

天台六十卷よかゞくして源氏卒

帖とりくらも中よ并の巻ありて大へ帖よかゞく。毛と

法華經大八品よ擬と天台六十卷とく。

釋藏十卷

妙樂作

天台六十卷よかゞくして源氏卒

弘安十卷

妙樂作

一卷とく之次才

三依司馬遷史記

本紀十二卷

自桐壺至白宮

世家三十卷

以宇治十帖比之

列傳七十卷

以並擬之

一此物語諸本不同事

明凡一切の文章よち書中書

清書のことあり。又展轉書寫の誤勝少へくに。凡太部の

拙俗書生の失謬勿端の多也

お石山ふく汝の身のをより書始第よ。とくとくみ
十四帖よかゞくをり。と權大納言行成よ清書よせられ
て大納言へあられたりよ法成寺入通園白山堂歎也。奥事と

加へられて云はれ候せどもアラ他よりさう。老比立
事と云ふ事也

愚云河内守は信奉教義より今界

一 河内守 お河内守源克行守也 明以八車接合取
捨為家車

愚案克行清和十代苗裔河内守大監物
お是ハムナムモアモ御紙之或ハ御とスヅリ表記を
付テ右様よろづの或役ついで多く作との事とハ

り、アラモトニシヌ

一 駒表紙 明克行中納去定家也

明此御紙の如く、史記の如きと同様にて曰役と以く
アラモトニナキテ後生れあるよ。書生の保有スベリと

御と今あと加く、ナシ改め本ノリナシよ。本ノリ
ナシのナリテ御紙の本意とスヅリ、本ノリナシの
本義紙と本ナシナリ化名の本意とスヅリをして本ナシ
本也

一 此物諸抄

源氏奥入

行成四五代末孫定信子富嗣權が捕從五位上
行之作

追注加

定信卿作 愚案奥入之事と云ふ事

水原抄

河内守克行作 河内守註

紫明抄

行成四五代末孫定信子富嗣權が捕從五位上
親行之武部正親行才業要事本義作河内守註

源中^{ケン}最^{ナウ}秘^{サク}抄^シ 日人作 源氏中^シ秘^ス説也

源氏論義^{ヨンギ}

弘安年中 論^ス源氏物語 雜文 明 伏見院東宮は

河海抄^{カイ} 卷

順徳院才三世、孫四達、左大臣善成^{ヨシナリ}の作也
一說ニ号^ス松岩寺^{セウガ}左府法名常勝^{ヨウジョウ}

明是多原の山^{タマラ}と云^フ。或^ハ拾て^ミよ^フ故事來歴^{エイセイ}引^ク
効^ハ義理^{ヒヨウ}と述^ハる是尚^{カナ}河内方^{カナ}よ^ハ近^シ也

河海抄序

先源氏物語^ハ寛弘乃始^ハアリ^テ。其來て、康和のありひろま
アリ^テ。後醍醐院御位のそ^ノ下め、彼禦龕^の奇仙^ハ作^ス。そ^ノ
万葉集^ト後^ト。大監物^{充行}ハ^シ御^ハくの口傳^ト抄^ス。水原
と名つあ^リ。もうのをあ^リ。伏見院^ハおも^リ。

時向題^ト左志^ハすす^ム。ちかく後^ハの傳^ス文^ト。わざ^スも^リ
き。後醍醐院御位のそ^ノ下め、彼禦龕^の奇仙^ハ作^ス。そ^ノ
万葉集^ト後^ト。大監物^{充行}ハ^シ御^ハくの口傳^ト抄^ス。水原
と名つあ^リ。もうのをあ^リ。伏見院^ハおも^リ。

ひとめづく黒板のねりんもれぬことかうひと。と
よ羽鶴の萩のわよもとくさう。あらぢく丸巻と
と名つもく何海妙とつ。すりとり室の巻とじつびと。
枝の葉をあくまく。これへまく見。審へくさうわきうりを
もどりそども。故うと温新タチことあらかくまくらとさんざ
ちうづくうしとちうととえ半とくら

花鳥餘情カナツヨガウ 卷一 条篠閣カナツヨシ 兼良公作号ス後成恩寺セイエンジ
明有丙年一八九〇年正月一日 花鳥餘情

故子安幸相遠 そり

明 河海の誤とぞして。生理と演説と。是を從事表
紙りハお遠のく。ふるまく。されば善表紙よハ只奥入一
おの角とちうのミヤウ。されば海を多のあ役うく。
いづく物語の東西とよきまづやむ至寶ホウの妙也

花鳥餘情序

あがまとりくのじうをものねくよと。葉をそろげの
えのゆよたとひうぐく。深くまかへくわくよ文よ
けよすく。くくくやまく。ひえぐあひよくえとまく。
りゆの至寶へ深底熟によくうへらう。是よよりく
代このりくあくびよとやうく。花鳥餘情と號つ。書
の註釈まくかく。雪堂の功とつむと勤てよくとよ。あふげ
れゆくの何海妙と。いまと勤てよくとよ。あふげ
くらともお中の角よりひて。捨角の道とゆく。あふ
いあれど手の海よとよどりて網とすれうち草とあり。
洞の林よとよとくわと守兔よめく。殲まうとく
うふわやまうとあくまく。じうひ先達のあくよとつま

多眼の多々事と草古よりくわむ事情と名はれ
半もすあり

源語秘訣 源氏の内十ニテ際の秘訣あり 日作

和抄 一冊 日作

年立 一冊 日作

うれしくは皆河内辛夷耳く善表紙と用ひれどり
一に西三条御府裏院サヌタカニ号遙院セイウヨウ二条家の奇古と
中奥ナカヲをひて、宗祇と済候合ありく、善表紙と用ひ
まゝそれよりこの世アマガシには流フよく善表紙と用ひ
不審抄出 一冊 宗祇作 河花の善抄の外不審の事アシなどを
兼良公ハラタケル同著也

帚木別註 一卷 日作

咲花抄

八卷お宵拍老人シヤウバフジン書、逍遙院セイウヨウ潤色ルンセキ久我廣流

牡丹花老人号夢菴ムダウ

細流

大卷 西三条公條公号称名院キムヂ之作也

仰後是堺花シマヒナとシマヒナて其不足アマタラと補ひ、河海花カヘヒナ
の誤アラタナ共可取アリと用ひ候て、経院可取アリ
何花アマヒナ或アリ抄シマヒナあやかアヤカと云ふ云々

明星抄 七卷

西三条實澄公号三光院之作云々

仰後

細流シマヒナと愛篠エシナ一冊と加くく所くよ小納チホあり

孟津抄 七卷

九条祿同桂通タチミツコトシ号東光院ヒタチコウイエン之作也

奥德老人云、古外祖父遙院殿の源氏物語也アオシメシタタヒタケルあり。

種名跡歎よ并同すく極め。三充當多よに寄鑒矣
くよみびとえ。愚案は盡体抄へる海花多の家
祇別種喚花あと角い。或へ要とみて累々
しれ本多のよへぬ役とからう。但思卓將軍のあや
まち不才にて不審の事。ども多く。よりてそな役と
用ひもの十よ三四よど可情矣

孟津抄序

凡例

一 益津抄云 源氏ともいへる地とひびて 盛者必裏のらと
すく可見り かく爲て はぬ色のことより びしよもく
すり 故に源氏とい能考て 可見え

一 予先年箕形ミカタヒヨウ如菴アツハ八葉宮ハヤハラノミコト トサ 菊花の講談とす。十
みナの秘訣三ヶの口傳ロクモン おと語めたり。又先師遺稿ヨシホウ ト
眞徳マヂヅキ ト桐壺キリカケ 一巻の講談とすて。此物語の口傳ロクモン 木再交

一 佑一ヨウイチ 云如菴老人アツハシジンジン 人ヒトと称名院ミエイン 院敷イリウツ うつ
て、八葉のまろか前マロカヘ まくを講ハセ きらやまれゆマレユ とく。
まくよけ傳ハセ 人ヒト へ細流スイリュウ とほてりトホテリ されゆマレ とく。又道極
朝アサヒ 九葉クモガタ 乃オ 东光院ヒタヒタケイ のまくよもくマムク そもくソムク そもくソムク
代タメ 稲イネ の奥ウラ 美モエ と極マツル く汝タマ 九葉クモガタ 大岡幸家ヨウギ 公ヒロ の前マフ
てわくマク まくマク は遊ハシマ うりウリ 仰ハシマ されば是ハシマ は考マサニ よ益津抄
と考マサニ よれマサニ そりては抄ハシマ も細流スイリュウ 益津ヨシタ のあ抄マサニ と
さやくマサニ と河海花カヘハナ の要マサニ そり。堯花ヨハナ の星ヒトツ とひらひ
て初マサニ の人ヒト とあとマサニ そりの也

一 此抄ハシマ 河海花カヘハナ 報ヨハナ 細流スイリュウ 明星ヨウジン 益津ヨシタ 等ドウ 組ツク 抄
と用マサニ い肩マサニ は河花ヨハナ 報ヨハナ 細明スイミン 益ヨシタ とあとマサニ そり

一累年^{チニ}抄^シおと勘合^シをも争^フうが空^スちよかうの紙^ハうござ
筆^ハの後^シ又或^シ抄^シ或^シハ抄^シとぞうりもすゝけ

一師徒ともうまくまめい考如菴老人の後也。以心君士代後ハ
キガニの三又三とちひ、三光院の山後の下、師徒作ト
一諸妙註解の下よりととのうやうの後とあととあと、更
案とす、又詮ねの不註もととととととととととととととと
とあまとりのへ皆画意の辟案と

一
の
海
花
も
お
糞
花
の
役
と
り
よ
も
細
孟
の
中
よ
書
加
く
あ
く
の
役
ハ
多く
、
筆
書
と
不
成
細
孟
と
お
く
細
の
役
何
花
糞
孟
の
役
よ
趣
回
く
時
も
、
内
花
回
糞
回
孟
回
す
ど
と
他
准
く

一 諸おのの古事記歴註解ホの羽聲ライトモキ
あく首文よ記メモリスノの言語應對エイドウの歴史リョクシ
也、文章の註解詞ツキトカタムヘキ經の脚付カツブトモキ。皆書
蒙モウのもとトモトモハモキ。

一
引教乃ハ本經の術よアの兵ともアテ首云ナリ事
シ、引寄上句ナリモアキ。或ハ下句ナリモアトヒ童蒙
の口ナリキは号モアタリのれ、又エヨウモアトヒ童蒙

一文書の外よりうやうやしくトのきおへ粗がよもよどり
もわざわざひもせんぐくとけそゆつて
右をほかの外より或ハ秘伝ともいへ或口訣ともいへとやむ
壁論の後とまく多くあらそひのうりに花鳥細画乃
はかよもよううなまむる空^{スル}信用故よほせよとぞれ
空也。但桃華の内祕訣ニテナキ事等の意匠のもの也。

一 丸は萬葉の中より載らるゝものゝ氣象行跡一家の風
後和歌の風神始終皆深くありて而してお遠か
能と付をも若無とすのみ。猿がともぞりてもぞれよ
かくく平生修身のあくまうとぞくへとお歎

卷之付名車 花丸五十四帖の巻之名より四つのことあり。
一曰御守り。ニ曰御守り。三曰御守り。四曰御守り。二つと
より。四つと奇す。御守り。御守り。御守り。御守り。天台の教
よ四門あり。一、有門。二、空門。三、亦有亦空門。四、非有
非空門也。是よ云ぞくと云々

愚案此きの名より四つのふわうる。必彼四門のくよう
くゆゑあるべし。只四つの教ばかりをあざく。ゆうり花乃居
後アノベ。一、四門とも云々。台家より三益遍別家の四教
ともよ四門ありて。十六門と立すれハ四教ともよ四門の
ちよくうちりや。奉繁義もされハ別よ記く。もよ
玄義ハ止觀六よ考。旁教の四門を文句四よあり。ろ
又此四門の後よつてく。係出一部の教とい通理よあつ
沒あり。別よ記く。或後は四門有空亦有亦空等と
空假中の三諦もあつた。台家不空の辟業し。必
不可用者也

か右説至近年。世間と見ゆ。而毛詩名篇例あり。實
くわゆぢうるや。是師説也

毛詩正義云。名篇之例不過五。

名篇之例義無定準。多不過五。大總取一。或偏舉兩

字、或全取一句、偏举則或上或下、全取則或尽、或餘、亦有捨其篇首、撮章中之言、或復都遺見文假外理以定称、

私云此猶名之卷々の名是とりと准をもたらし

毛詩正義云名篇之例不過五、

纏取一、

は物語のきり名より二三とひびく字ばかりして名づけるよ准をも

蓬生 奇すも向かと遠とゆきて生のまかー
夢浮橋 夢のまどりもとば橋のまとくもて名とせよ

一或偏举两字偏举則或上或下

奇とくりて名とせらよ准をも又奇とくれども初の既

づみわう

帚木

空蟬

葵

花散里

漆標

玉鬟

御法

幻

橋姫

椎本

東屋

浮船

少奇とくも

若紫

奇のやよニシカゲアリドモ若紫とは

けくとく

一或全取一句、全取則或尽、或餘、

奇と組とくも入奇と組ふりへどもこののううち不わくわう

夕顔

未摘花

賢木

須磨

明石

松風

槿

一女

初子

棠

簾火

若菜上

柏木

鈴虫

総角

靖齡 以上奇之復以之為
上

閨屋

薄雲

常夏

胡蝶

行
七

真木柱

橫笛

夕霧

紅梅

早
幕

寄生

亦有捨

四
四

柏蠹

卷之三

豆種

紅葉記

花宜

繪合

卷之三

物の雲淡庵文集

思案是毛詩乃篇より名づけ例ありわざよばれ所
のきく乃名せば善うかうとつよひかび波又
ワの例とやうてて又み様よもじらきうみうる
也

一
古物錄有笄之卷事。其ふニヤリ。或ハモホシ書有
ちり未と云つても多く別ヨ一卷トモナリ。且筆方を以笄
物音。附牒等。模倣之の笄。玲虫等のれ也。又或ハノ人
人のくへぐりとことよ一卷ヨ云ゆきたり。帝本臺の
笄。空牒。タ敷。櫻標卷の笄。蓬生。罔罟。白宮等之笄。紅
袖。竹川のれ也。又其笄の走。よ年紀の沿革とまうよに
ゆく。或。鑿。笄。或。模。笄。或。意。模。鑿。笄。此三のふあり
堅の笄と云ふ。バ弔木の笄の空牒。タ敷。是帝本

卷へ源氏十八年の夏の夜もすと書ひておゆか
年の夏秋その年と空は夕食よは事へとく書。又お
駕のをへ源氏十八年の十二月とて終り初も走
へれん衆一役立翁の正月よりさつであな。よきよ年紀に
オレと里よ古と云く様道の弄代虫と曰ふてやうり。
様の年と、水尾畫^{シマエ}の井園屋是也。水尾畫をへ源氏
衆よりたハキの十二月とてゆくを度まう。がよ。國名意
詠せたハ衆の内月のすとちり。是水尾畫のやうにす
とすとくとも。又駕あうれど別よもうきく。ひいて年
紀横あらわん。びくとく。又蓮生のまことづくしも
まつてこくりたハ衆の夜もとおもての様の弄へと花
盆よわきじよ。御もともの細よ二とせづづりげ古えよ

ヤマカツキの東の櫻へとあり。すすむらゆく。細葉より櫻
の芽とのうち。櫻畠の芽と。ま橘たの芽をみぬけり。是
が葉の芽よ源氏十七罪の二月より冬をすゞのゆうと
すすま橘花の芽。乃初の源氏十七罪の二月。ひそり。さて
横やくよ。どゑへとみ葉の筋。年。のまやくと。すく墨に
やくし。ひめ櫻は生と。あつと。達生の芽を細葉のふ
うれじ。せせり。又匂宮の芽。紅梅。竹川の二度。人御接
坐を。薦す。年紀混雜の。あり。仍る古人
の。おとと。紅梅。紅葉。大納言の列傳。竹川。竹川の。なま
の列傳と。うそ。と。うそ。玄様。之。露。端。に。く。ぐ
え。ゆ。く。

一物語并之例 ほじうやの物語。おま三の並。春日參。又

才ひ吹上の。並。參の後。氣の。事。か。て。あり。又。紅
梅の。物語。とり。物語。おも。並。一帖。わ。り。是。お。の。例。や。り
三史記列傳七十巻 以。並。數。え。え。前。二。高

